

共生・公正・創造



# 東日本タイムズ号外

<http://www1.biz.biglobe.ne.jp/~JRTU-HWU/>

ジェイアール東日本労働組合  
〒108-0014 東京都港区芝5丁目33番36号  
TEL(NTT)03-3453-2107 (JR)057-2290  
発行者/今井 伸 編集者/平 憲治

【シリーズ22】

## \* 予期せぬ「浦和電車区事件」捜査での 7人逮捕と松崎氏の激怒

柴田氏はJ R 東日本が採用する警察OBの選択・人選などについて絶大な影響力を發揮していると言われており、実際、柴田氏のお気に入りだったかつての部下たち、柴田氏と親交のある現職警察幹部と近い人々が多数選ばれてJ R 東日本入りしているようである。

そして、表面的にはJ R 東日本会社が採否を決定したこれら警察退職者の「再採用」問題に関し、松崎氏は、「警察OBを何人採っても俺は一切文句は言わない。ただし、我々の組合のことには絶対に口出しをさせるな」と言っていたとの話が伝わっている。

これが事実として、松崎氏の心中を察するに、要は、「“ガードマン”は、“ガードマン”らしくしている」「余計なことに口を出さず、公安警察情報入手に専念することが肝要だ」ということか。

ところが、02年11月1日の警視庁公安部による「浦和電車区事件」捜査に関しては、柴田氏以下30数名も採用されていた警察OBが事前に全く情報が取れなかったということで、松崎氏は激怒、「柴田の野郎！ 年間2,000万円もの交際費を使っているが、クソの役にも立たなかった」と口汚く罵っていたとのことだ。

また、この事件後、柴田氏は「浦和電車区事件」捜査に関し、「あの事件は上に報告しないで暴走した奴がいる。自分が警視庁のトップに抗議に行ったところ、トップは『これ以上、J R 東労組には波及させない』と言って謝罪していた。だからもう大丈夫だ。あんな事件、自分が事前に知っていたら簡単に潰せたのに…」等と会社で話していたという話が伝わっている。そして、この情報を裏付けるような次の話もある。

同じ年(02年)の暮、北海道警と警視庁が、札幌市内にあった革マル派「札幌アジト」を摘発した。このアジトには、盗聴や窃盗、家宅侵入、盗撮等の非合法活動を日常的にやっていた革マル派の非公然組織のトップである塩田明男他3名の指名手配者が潜伏していたことから、これら手配者が逮捕されている。

そして、これらの被疑者について警視庁公安部は、「神戸の病院に精神鑑定のため保管されていた検面調書等の窃盗事件」や「神戸大学医学部への侵入事件」、「被疑少年の両親宅への侵入・盗聴事件」で、幾度か再逮捕を繰り返していたようである。ところが、これらの被疑者に関する最終の事件として、革マル派非合法活動家による「国労幹部宅への侵入事件」で被疑者を逮捕するに際してJ R 東労組本部や松崎氏の住居等を搜索しようとしたところ、

「現在ある県の本部長をしている警察の上級幹部が、強引にこの搜索を中止させた」

という重大情報がある。

とすると、これは「浦和電車区事件」後の警視庁トップに関する柴田氏の“発言”情報どおり、「J R 東労組には、以後、波及させない」が正に“現実化”したということになる。もし、これが事実ならば、“警察の大スキャンダル”ではないか！

# 民主化の声・声・声・・・

2005.11.25 その22

## (読んではいけない?) 「小説労働組合」の読み方! (2)

~月刊誌『自然と人間』を通じた党革マルとの関係?~



\* 「...俺は労働研究所を会社組織に転換するのはいい。しかし、そこに鉄道連合を攻撃している労働者党のメンバーを入れることには反対だ。皆が言う良いメンバーかどうかの問題ではない。彼らを入れる事自体を認められない。そうしたいというのなら、最低限、組織の中で議論し意思統一をはかるのが当然ではないか」

(p. 11)

\* 2002年が明けた。労働研究所の会議には、常連メンバーのほかに、鉄道連合の軽部委員長と川下書記長が参加するようになっていた。軽部が口を開いた。「暮れから、良心的な労働者党メンバーと交流してきた。彼らの中に、雑誌編集に詳しい者がいて『労研』について意見交換をした。いくつかのアドヴァイスがあった。先ず、今のような内容では面白くないということだった。執筆者についても鉄道連合のOBではなくプロに依頼した方がいい。経営については労働組合との関係は切断して民間会社にしたらどうか。場所も鉄道連合と同じ住所ではないほうがいいとの意見だ。彼らは人も出さずし出資も考えていいと言っていた。検討するのは当然だが、結論はできる限り早い方がいい。鉄道連合は前向きに考えている」(p. 12~13)

\* 大元の朝令暮改は日常茶飯事だ。そのことはリーダーとして必要なことである。鈴木がとやかかくいうことではない。問題は、敵対関係にある労働者党のメンバーと共同の編集、経営をするなどという点だ。いくら大元の指示であっても鈴木は納得できなかった。...

(p. 13)

東労組の組合員が配っている本であり、解説書まで出回っているわけであるが、告訴好きの団体のことを考え個人名は極力避けると、おそらくこの文脈の読み方は次のとおりであろう。

【2001年暮れから2002年初にかけて、月刊誌「労研(自然と人間)」の発行部数拡大について労働者党(党革マル派メンバー)と鉄道連合(JR総連)委員長O氏らが交流、意見交換した結果、共同で編集・経営を行うことで合意した。鈴木(F氏)はこれに反対したが、大元(M氏)の意向と指示の下に事柄は進められた。そしてこの件も理由の一つになって、F氏はM氏の逆鱗に触れ、鉄道連合非常勤顧問の地位も失った】

JR労働組合運動の関係者間の一致した見解では、この本の主要な登場人物「鈴木」は、動労出身で東労組役員を長く務めた福原福太郎氏(元JR総連委員長)だとされている。JR総連・東労組と革マル派との関係が社会問題化されているが、そのパイプ役として「自然と人間誌」が存在しているとすれば、これは大変なことである。また、それをめぐって鈴木(F氏)と大元(M氏)の内部抗争が始まったとするなら大変興味深い。

民主化の声・声・声・・・ (続く)